

■世界文化遺産「飛鳥・藤原の宮都」特集



皇居東御苑への入口として使用されている「平川橋」とその先に位置する「平川門」

関西大学考古学の学統と誇り

——受け継がれる陵墓保全への思い

- 前宮内庁書陵部陵墓課 陵墓調査官・関西大学客員教授
徳田 誠志 さん —文学研究科1989年修了—
- 宮内庁書陵部陵墓課 陵墓調査室
田中 詢弥 さん —文学研究科2022年修了—

2026年7月、「飛鳥・藤原の宮都」の世界文化遺産登録が決定した。日本国家の成り立ちを示すこの飛鳥・藤原の地で、戦後70年以上にわたり発掘調査と研究を牽引してきたのが関西大学文学部考古学研究室。その学統を受け継ぎ、宮内庁書陵部陵墓課で30年以上にわたって陵墓の保全や調査に携わった徳田誠志さんと、その職を引き継いだ田中詢弥さんに、陵墓保全業務の最前線から、世界遺産登録決定への思い、世代を超えて受け継がれる「土規七則」の精神まで、考古学研究室にまつわる物語を聞いた。

●陵墓保全を支えるプロフェッショナル

——宮内庁陵墓課での仕事について教えてください。

徳田 「陵墓」という言葉自体へのなじみが薄いかもしれませんが、皇室のお墓のことで、歴代の天皇や皇后のお墓を「陵」、それ以外の皇族の方々のお墓を「墓」と呼びます。宮内庁が管理する陵墓は全国に460カ所899あり、天皇陵としては初代の神武天皇から昭和天皇までその形は多種多様。陵墓調査室の研究職員は、これらの陵墓を適切に保全し、未来へ伝えていくための学術的な調査・研究を担っています。私はここで32年間、主に古墳時代の大形前方後円墳の調査や研究に携わってきました。



▲宮内庁時代、最後に訪れた仁徳天皇陵にて（2022年）。右は2021年調査時

田中 私は2022年に入庁し、5年目です。専門分野は古墳時代ではなく、中世・近世の城郭ですが、明治天皇伏見桃山陵が豊臣秀吉の伏見城跡に造られているように、城郭と深いかわりを持つお墓もあります。この分野（城郭）を専門とする職員は陵墓調査室では私一人ですので、新しいアプローチで陵墓の保全業務に貢献できるのではと感じています。

——陵墓を守るうえで、難しさを感じることはありますか？

田中 近年は自然災害が多いことが気に掛かっています。能登半島地震の際、私は石川県加賀市の出身ですので特に心配になり、江戸時代の皇族のお墓がある野田山・加賀藩主前田家墓所を訪れましたが、周囲の前田家のお墓や多くの灯籠が倒壊しているのを目の当たりにしました。文化財としての価値もある陵墓をどのように災害等から守り、その本義を継承していくのか、難しいですがやりがいのある課題です。

徳田 陵墓は全国1都2府30県に分布しており、皇室の活動が全国に及んでいることが分かります。陵墓についてはさまざまな意見がありますが、地元の方々が親しみを持ち、大切にされている姿を見るたびに、この長い歴史を守り伝えていくべきだと強く感じます。

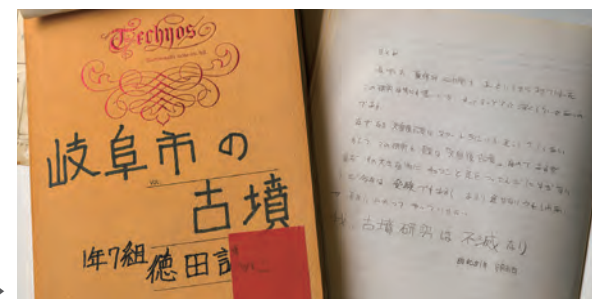
●50年前の「自由研究」と「一度きりの実験」

——考古学に興味を持ち、関西大学を選んだ原点をお聞かせください。

徳田 中学1年生の時、先生が「岐阜市内にも古墳がある」とおっしゃったのが始まりでした。それから夏休みの自由研究で市内の古墳を巡り、写真を撮って図面を描きました。今日持参した50年前のノートには「我、古墳研究は不滅なり」と決意表明まで書い

LEADERS NOW!

徳田さんが中学1年生の時に夏休みにまとめた研究ノート。最終ページには「我、古墳研究は不滅なり」とあり、その情熱は50年を経た現在も消えない▶



ています(笑)。その後、網干善教先生がマルコ山古墳の調査をされているニュースを見て、「日本一大きな古墳がある大阪に行き、関大の網干先生のもとで考古学を学ぼう」と決意しました。

田中 私は金沢城の復元ブームなどに触れる環境で育ちました。小学4年生の時、歴史漫画を読んで歴史用語を「自学ノート」にまとめたのが原点です。その後、纏向遺跡の特集番組を見たり、『魏志倭人伝』を読み解いて邪馬台国論争をノートに整理したりするほど没頭しました。そして大阪に出て歴史を学びたいと思い、関大に進学。米田文孝先生の授業で博物館を見学し、気付けば考古学研究室に定着していました。



▲出雲大社への研究室旅行

——考古学研究室において、特に印象的だった経験を教えてください。

徳田 大学3年次生の時、壁画が見つかる前のキトラ古墳の測量調査に参加したこと、インド国にあるサヘート遺跡(祇園精舎)の日印共同学術調査に参加したことですね。海外では、出土品の年代が直感的には分からないため、「深く掘るほど古いものが出土する」という考古学の原則「層位学」や「型式学」を徹底的に学びました。調査を主導した網干先生は、風呂にも入れない過酷な環境でも「風呂に入らなくて死んだやつはいない」と一喝し、自らも肋骨にヒビが入る怪我をされながらも調査を続行され、学者魂を背中であげていただきました。



▲日印共同学術調査でのサヘート遺跡(祇園精舎)にて(1987～1989年)

■世界文化遺産「飛鳥・藤原の宮都」特集



田中 詢弥——たなか じゅんや
■1997年石川県生まれ。2020年関西大学文学部総合人文学科日本史・文化遺産学専修卒業、2022年文学研究科総合人文学専攻日本史学専修修了。考古学研究室では米田文孝教授に師事。2022年宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査室入庁。現在、関西大学文学研究科総合人文学専攻史学専修修士課程後期課程に在籍中。

関大考古学研究室では一流の研究者のもとで、歴史の教科書に載っているような遺跡や遺物を調査研究するという、他では味わえない経験ができます。ぜひ真実を自らつかみ取る面白さに挑戦してください。

田中 大学院生時代に参加した中尾山古墳の再発掘調査では、米田先生の「発掘調査は一度しかできない実験」という教を胸に、遺跡を壊さずに八角墳の確証を得るためのトレンチ(調査区)設定を真剣に議論しました。仮説通りに八角墳の角石が出土した瞬間の感動や、1300年の時を経ても石槨内部できれいに磨き上げられた壁面が輝いていた光景は、今でも脳裏に焼き付いています。



▲大学院生時代に参加した中尾山古墳の再発掘調査(左が田中さん)
◀宮内庁による仁徳天皇百舌鳥耳原中陵の第3墳整備工事予定区域の事前調査で報道関係者に説明する田中さん(写真提供:産経新聞社)

●「土規七則」の精神と、奇跡のバトンパス

——関大考古学研究室の「強み」は何でしょうか？

徳田 全国各地に文化財に携わる卒業生がいること、研究室の創設者である末永雅雄先生が残された「土規七則」でしょうか。これは吉田松陰の教えを学生向けにアレンジしたもので、「生活は質素、研究費は放胆に使い」「体調に留意」「相互扶助」など研究活動をする上での七つの心得です。

田中 私も自然とその言葉を目にして育ちました。体調を崩して入院した際、先生方も病室まで見舞いに来てくださって、この土規七則の精神が、研究室の温かいチームワークとして生きていることを肌で感じました。発掘調査は一人では絶対にできませんが、互いを補い合う土壌が関大にはあります。



(左上) 考古学研究室にて、米田文孝教授から卒業証書の授与
(左下) 卒業式後、考古学研究室・米田教授と同級生たちと(左が田中さん)
(右) 戦国末期から江戸初期の惣構(城・城下町を囲う土塁と堀)について執筆した卒業論文で、文学部卒業論文優秀賞を受賞

——田中さんが宮内庁へ入庁した背景には、不思議な縁があったそうですね。

田中 大学院1年次生の時に大谷翔平選手のような「目標管理シート」を作り、実は「宮内庁書陵部陵墓課に入庁する」と書いていました。陵墓課の研究職員は退職者が出ない限り募集がない狭き門ですが、チャンスが来た時のために必死に論文を書いていました。するとわずか1年後、徳田先生の退官に伴う募集があり、米田先生からも「すぐ受験なさい!」と言われ、運命的なタイミングで内定をいただくことができました。

徳田 優秀な応募者が多数いた中で、実力で内定を勝ち取ってくれて本当にうれしかったですね。

●飛鳥・藤原への思いと考古学の魅力

——「飛鳥・藤原の宮都」が世界文化遺産に登録されました。

徳田 私の考古学人生は明日香村の遺跡に育ててもらいましたので、本当に感無量です。宮内庁時代にも天武・持統天皇陵の構成資産入りについて、地元自治体や関係省庁と議論を重ねてきました。

しかし、世界遺産への登録はゴールではなくスタート。関大は「飛鳥史学文学講座」の開催や、明日香村との連携協定を通して学術成果を還元し続けていますが、今後は考古学だけではなく、さまざまな研究分野から世界遺産にかかわり、支えていくことが求められていると思います。

田中 保存されずに消えゆく遺跡も多くある中で、自分が携わった中尾山古墳が世界遺産となり、当時取り組んでいた一つ一つの調査に意味があり、歴史的価値を証明するワンピースだったのだと実感しています。「観光活用」と「厳格な保全」は対立するように思われますが、目指す目的は同じ「未来へ伝えること」です。

——考古学という学問の最大の魅力は何でしょうか？

徳田 私は考古学(アルケオロジー)をもじって、「考古学は、歩け学(あるけがく)」だと言っています。自分の足で遺跡を歩き、目で見て、手で触れることができる。遺跡・遺物は決して嘘をつきません。千数百年前の歴史の真実を解き明かすことができる、その瞬間に立ち会える興奮こそが醍醐味です。

田中 研究分野の中世・近世では文献が多く残っていますが、当時の支配者の思惑によって書き換えられた記述が多々あります。発掘調査で出土した事実と文献が異なる場合に、「なぜあえて記述を変えたのか?」多角的な視点で推理していくプロセスが一番



皇居内に建つ宮内庁書陵部の庁舎を背景に

自分の足で遺跡を歩き、目で見て、手で触れることができる。遺跡・遺物は決して嘘をつきません。千数百年前の歴史の真実を解き明かすことができる、その瞬間に立ち会える興奮こそが醍醐味です。



徳田 誠志——とくだ まさし
■1962年岐阜県生まれ。1984年関西大学文学部史学・地理学科卒業、1986年文学研究科日本史学専攻博士課程前期課程修了、1989年同博士課程後期課程単位取得後退学。考古学研究室では網干善教授に師事。2005年関西大学博士(文学)。1990年宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査室入庁後、2022年定年退官まで仁徳天皇陵など古墳時代の陵墓における保全・調査業務に従事。関西大学客員教授、国士館大学客員教授。

面白い部分ですね。考古学は、測量やミュオン透視等の先端技術も活用する総合科学ともいえます。

——今後の目標と後輩たちへのメッセージをお願いします。

徳田 近いうちに集大成として著作を刊行することが目標です。32年間の大形前方後円墳の調査知見をまとめ、次世代へバトンをつなぐことが使命だと思っています。歴史や考古学を学びたいなら、関大を選べばまず間違いありません。考古学に限らず、どんな分野にも挑戦できる大学ですので、自分が選んだ道を突き進んでほしいと思います。

田中 私は現在、博士課程後期課程にも在籍しており、まずは博士号の取得を目標としています。学術的な知見を蓄え、確かな専門性と信頼性を備えた研究者として、遺跡や陵墓の保全と継承に貢献したいと考えています。若い皆さんには、まず一歩踏み出して、その先に広がる世界を見てもらいたいですね。関大考古学研究室では一流の研究者のもとで、歴史の教科書に載っているような遺跡や遺物を調査研究するという、他では味わえない経験ができます。ぜひ真実を自らつかみ取る面白さに挑戦してください。